

昨日(12日)は東京に木枯らし1号が吹いたようだ。昨年より一日早いとの事である。一転し、本日は、小春日和とも称して良いような絶好の日和であり、孫二人を車に同乗させて、さいたま市西区三橋の青葉園に向かった。実は小生が副理事長を拝命している「NPO法人埼玉県国民保護協力会」の役員会が先般青葉園で開催され、青葉園の由来等をお聞きして、とりわけ従軍看護婦の集団自決の話に胸打たれ、是非ともお参りと写真撮影をすると共に、その由来等を知りたくて、伺った次第である。



(青葉慈蔵尊：山下 11/13 撮影)

卑劣なるソ連兵の毒牙にかかるよりは、大和撫子の純潔を守らんが為に悲壮なる集団自決を遂げた従軍看護婦の知られざる話である。慟哭なくしてこの話が出来ようか。樺太は真岡の電話交換士の集団自決以上に悲しくてやり切れぬ、ソ連兵の鬼畜にも劣る蛮行が忘れられている現状を嘆かざるを得ない。電話交換の乙女らの慰霊を弔う氷雪の門に比して、何と知られていないことか。

慈蔵尊の顕彰碑(写真左後方)に刻まれた碑文は以下の通りである。

『昭和二十一年春 ソ連占領下の旧満州国の新京の第八病院に従軍看護婦三十四名が抑留され勤務していたが ソ連軍により次々に理不尽なる徴発を受けその九名の消息も不明のまま更に四回目三名の派遣を命ぜられた

拒否することは不可能であることを覚悟したその夜 最初に派遣された大島看護婦が満身創痍瀕死の身を以て逃げ帰り全員堪え難い陵辱を受けている惨状を報告して息絶えた 慟哭してこれを葬った二十二名の乙女たちは 六月二十一日黎明近く 制服制帽整然として枕を並べて自決した

先に拉致された同僚たちも 恨みを吞んで自ら悲惨なる運命を選び満州の土に消えた
二十三年の暮れ 堀看護婦長に抱かれて帰国した二十二柱の遺骨は幾辛酸の末 漸く青葉園園主の義侠により此地に建立された青葉慈蔵尊の台下に納められた
九名の友の霊も併せ祀られ 昭和三十年六月二十一日開眼供養が行われて今日に至った
凜烈なる自決の死によってソ連軍の暴戾に抗議し 日本女性の誇りと純血を守り抜いた
白衣の天使たちの芳魂とこしなえに此処に眠る 合掌』

顕彰碑の裏面には、彼女等の遺書が刻まれている。

『二十二名の私たちが自分の手で命を断ちますこと、軍医部長はじめ婦長にもさぞかしご迷惑と深くお詫び申し上げます。

私たちは敗れたりとはいえ、かつての敵国人に犯されるよりは死をえらびます。

たとい命はなくなりましても、私どもの魂は永久に満州の土に止り、日本が再びこの地に還って来る日、御案内致します。その意味からも、私どものなきがらは土葬にして、こ

の満州の土にしてください。

昭和 21 年 6 月 21 日 散華

旧満州新京(現長春)

通化路第八紅軍病院 』

この後に全員の名前がそれぞれの手で記されている。

この悲劇の一部始終は、当時の看護婦長堀喜美子氏の「従軍看護婦の集団自殺」に詳しいそうだが、残念ながらインターネット本屋では探しきれなかった。

奇しくもと言うか、本日（13 日）の産経新聞 WEB 版に、日露戦争時に日本国内に設置された捕虜収容所の状況等を撮影した写真集発見との記事が掲載されていた。日露戦争時に設置された捕虜収容所では松山にあった捕虜収容所が、ロシア兵の捕虜を人道的に取り扱ったと言うことで、人口に膾炙し夙に有名である。

本写真集が撮影された「習志野捕虜収容所」も、捕虜を人道的に取り扱ったという事実を、当時の軍医大尉（陸軍東京予備病院新宿戸山分院の岡谷米三郎氏）が記録している。

因みに、習志野捕虜収容所は、全国に 29 あった収容所の一つであり、大阪の浜寺捕虜収容所に次いで多い 1 万 5000 人の捕虜を収容していた。

岡谷氏の記録によれば、捕虜収容所では、礼拝所や学校を自主的に運営しており、またビリヤードやトランプを楽しむ遊戯室の風景や散歩中に芝生に横たわる光景を撮影されていると言う。闇市まで許されていたと言うのだから、当時の日本陸軍のハーグ条約遵守の徹底が伺われ、何よりも、戦い済めば恩讐を越えて交流すると言う日本人の美徳が遺憾なく発揮されていると思える。

それにしてもこの日本側のロシア兵捕虜に対する対応と日ソ中立条約を踏みにじり満州に突如侵攻、数多の日本婦人を陵辱し、単なる労働力として軍人軍属等 60 万人余をもシベリアに抑留したソ連軍の蛮行との格差の何と大きいことか。

掘り起こされるべき歴史の真実がここにある。

（参考：青葉慈蔵尊顕彰碑、産経新聞 WEB 版、その他）